

流域の大学に期待すること

元永 秀 国土交通省関東地方整備局京浜河川事務所所長

京浜河川事務所は、東京都、神奈川県、横浜市、川崎市、町田市、稲城市と連携しながら鶴見川を管理している事務所です。

私が和光大学に参りましたのは、堂前先生の講座で講演を2回ほどさせていただいた時以来となります。これより前、昨年度の夢討論会¹⁾で来校の折には、大学という場所が人々を地域や流域とつなぐ非常にすばらしい場所になっているということに感動を覚えたことを今でも忘れません。特に「かわ道楽」の学生さん達が本当にいきいきとしながら、担当が記された名刺を持って丁寧に挨拶に来られたこと、それから地域に出て、フィールドを持って活動されている姿は、やはり大学という場があるからこそなのだと感心しました。



少し鶴見川全体の状況についてお話しいたします。東京と神奈川を流れる鶴見川ですが、流域の都市開発が日本一ということもあり、洪水で非常に悩まされた地域です。港北ニュータウンの開発時には、「上流域の開発以前からすでに鶴見の河口部では毎年浸水が起きているのに、上流で開発するとはなんだ」ということで、上流の開発を進めるために下流の治水対策をしなければいけないということになり、当時の住宅公団が浚渫費用を負担して、国が鶴見川の大規模な浚渫をしたということがありました。

日本で初めての総合治水が始まってから30年になります。その最初の取り組みが始まった場所で川の恵みについての様々な行事が行われるようになったことは、治水対策が進んで安全が確保されていることの証でもあります。

1) 夢討論会 鶴見川流域夢討論会。鶴見川流域を題材として学習に取り組んでいる子どもたちからの学習成果の発表を通じて、流域市民が交流を深めていくイベント。毎年2~3月頃に開催されるが、2007年からは和光大学を会場として、和光大学・かわ道楽の学生が司会、着ぐるみ、運営スタッフ等を務めている。

このように治水上非常に厳しい中で開発が立て続けに行われたことから、総合治水対策では、流域全体で治水をしようということになりました。川の中に洪水を押し込めて流すだけではなくて、山を守る、緑を守る、農地を守る。開発したら地下には調整池をつくる。校庭のグラウンドには浸透施設の機能をつける。そういうありとあらゆる手段をやって洪水を防ぐことになりました。総合治水という名前は格好良いのですけれども、じつは当時、川を管理していた国や都や県が「川の治水対策だけではダメです」と恥も外聞もなくお手上げをして、流域全体でやりましょうということで始まったのです。しかし、今考えるとそれはこれからの治水対策の先取りをしたことにもなります。その総合治水が行われて30年経つということです。

先日、NPO法人鶴見川流域ネットワーク代表理事の岸先生のお誘いで、「鶴見川流域ツーリズムフォーラム」に参加する機会を得ました。このときのテーマが「市民、企業、行政をつなぐ」と「自然と共存する都市再生型エコツーリズムの展開」でした。市民、企業、行政をつなぐということで、すばらしいさまざまな取り組みの紹介がありましたが、その考え方の中でこれからは大学という場所が拠点の一つとして加わることが重要であると思いました。このフォーラムは慶應大学の日吉キャンパスで開催されましたが、流域にあるさまざまな大学が拠点となって、ネットワークを組むということも良いことだと思います。治水が川だけでできなかったものを、総合的にやるのであれば、地域の魅力、地域の安全・安心、地域の経営というものも、大学、地域、企業、行政の総合的なネットワークでやれば、さらにすばらしいものになると思います。

今回の教育GPは「流域主義による地域貢献と環境教育」という名称です。川を管理している者を河川管理者と呼びますが、鶴見川においては流域管理者の事務局を担当しているというふうに思っています。さらにこれからは流域を経営するという立場で見ていただいたらよかろうかとも考えています。

安全・安心の部分については、われわれ行政が縁の下の力持ち、黒子となって、これからも支えていかなければいけないのですが、その上で、河川敷、堤防、川原の周辺地域、こういったものを一体的に、包括的に利用する社会実験等によって、流域におけるさまざまな魅力を発信することができるのではないかと考えております。

首都圏で初めての社会実験は、多摩川の川崎市二子新地でパーベキューを対象として行われました。1番目に地域の合意、2番目に公平性の確保、3番目に適正な管理ができれば、社会実験ができるというように法律も緩和されてきております。鶴見川全体を一つの経営という視点の中で、河川敷も含めたすべてを包括的に利用していただく時代が来ていると感じています。

先日、和光大学で講義を持たせていただいた際に、学生の皆さんが「こんなこともやりたい」「あんなこともやりたい」という夢を語ってくれました。大いに

夢を語って、できないからとあきらめず、「こんなことができたらかうだね」というところから意見交換をやったほうが面白いと思います。そういうところにも、大学における学問や学生たちの力が不可欠という気がしております。

年が変わり平成23年（2011年）になりますと、1月8日と15日には、源流から河口までの流域40km強を歩いていくという「新春ウォーク」があります。また、「総合治水対策30年の記念シンポジウム」が2月20日に慶應大学日吉キャンパスであります。また、これからお話しされます鶴見川流域ネットワークキングができて20年。さらに9月17日から「川に学ぶ体験活動協議会」（RAC）の全国大会が鶴見川流域を会場として開催され、全国からたくさんの方が集まります。そういう記念すべき年に、いろいろな夢を語って、それを実現するさまざまな方策を大学が拠点の1つとなって実現できればと思います。

いろいろ申し上げましたが、川の魅力や地域の魅力、流域という概念への取り組みは、さまざまな立場の人たちが手をつないで連携していけば、さらに大きな力になると思っています。これまでをしっかりと振り返るとともに、これからの夢を考えていきたいと思っています。

最後になりますが、12月にこんなに雨が降るとは思っていませんでした。12月3日金曜日の朝6時過ぎからすごい雨が降りまして、新横浜の小机にあります鶴見川遊水地では、できて7年目にして8回目の洪水調節が行われました。海老名と平塚では観測史上最多の時間降雨がありました。9月には静岡と神奈川で500～600ミリの雨が降りました。横浜気象台の観測では、この100年足らずで2℃ほど気温が上昇しているとのことで、気候変動も厳しくなっています。

京浜河川事務所は、そういった安心・安全についての取り組みを進めるとともに、流域経営としての社会実験も活用したいろいろな夢を実現していくために、今後も活動をしていきたいと思っておりますので、これからもどうぞよろしく願います。本日はこのような場を与えていただきありがとうございました。

[もとなが ひで]